

はしがき

「スラブ・ユーラシア学の構築」の一環として「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」という問題領域を措定することができると考えた場合、それは差し当たり捕らえどころのない、茫漠とした研究対象かもしれない。しかし、さまざまな切り口から対象を切開し、観察と考察を加えるならば、その内容豊かで陰翳に富んだ具体相を解明することができ、またそうした作業を積み重ねることによって、やがてはその複雑な全体像に迫ることができるかもしれない。少なくとも歴史研究の分野では、対象に分け入るための切り口が多様な形で存在しているのではないか。

21世紀COE拠点形成プログラムとして、かねてより北海道大学スラブ研究センターが申請していた「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏と地球化」の採択が決まったとき、「事業推進担当者」の一人は、このような観点から「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」研究会を発足させることにした。それは昨年秋のことであったが、以来半年の間に同研究会は、第1回（2003年11月11日）、第2回（2004年1月20日）、第3回（3月26～27日）、第4回（5月24日）と着実に回を重ね、センターの連続セミナーとして定着することになった。本報告集は、第1回～第3回「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」研究会に提出された報告ペーパーのうち4編を収録するものである。

森永貴子の論文「イルクーツク商人とキャフタ貿易－1792年～1830年－」は、キャフタの露清国境貿易の展開に関連づけて、イルクーツク商人層の動向を詳細に検討している。1727年のキャフタ条約によって成立したキャフタ貿易は、18世紀のあいだはシベリア産の毛皮と南京木綿と呼ばれた中国特産品を機軸商品としていた。ところが、度重なる中断ののち1792年に再開されたキャフタ貿易は、その後20～30年のあいだにロシアの工業製品と中国茶を主要品目とするようになり、従来のローカルな性格からロシア市場と密接に結びついた貿易へと変容を遂げた。その過程で形成されていったイルクーツクの中継交易網の歴史的な性格、ロシア・アジア間の遠隔地内陸商業の実態分析は、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」という問題領域の基礎過程に関わっており、その解明において森永論文は日本のロシア史研究で相対的に立ち遅れているロシア商業史研究を大きく前進させる貴重な貢献である。

西山克典の論文「クルバンガリー追尋－もう一つの「自治」を求めて－」は、ロシア革命後の内戦期に出身地の南ウラル、コルチャーク政権下のシベリアを経て、アタマン・セミョーノフ体制下のザバイカルで活動し、セミョーノフ軍の敗北とともに日本に亡命したM・Γ・クルバンガリーというバシキール人ムスリム指導者の内戦期における活動を跡づけている。コルチャークのクーデタに端を発するバシキール民族運動の亀裂により、その指導層内では赤軍の側に立つゼキ・ヴァリードフ、白軍の中で民族運動を続けるクルバンガリーという分岐が生じた。その後クルバンガリーはシベリアからザバイカルへと転戦す

る過程でセミョーフに期待するようになり、実際セミョーフのもとでバシキール将兵はコサック自治に相応する権利を手に入れた。ザバイカルでセミョーフ軍（および同軍をバックアップする日本軍）の支援のもとに、バシキーリヤの解放とコサック自治に準ずる民族自治を目指したクルバンガリーのバシキール民族運動は、しかしセミョーフ軍の敗退によって潰え去った。これらの重要な論点を含む内戦の諸側面は、近年までロシアでもほとんど知られてこなかったのであり、西山論文はシベリア内戦史研究、セミョーフシチナ研究に一石を投じている。なお、西山はセミョーフ軍の敗退、日本亡命後の過程については、「クルバンガリー追尋—状況に待機して—」を続編とする構想をもっているという。いわば「ロシアの中のアジア」は 1920 年を境として「アジアの中のロシア」に接続するのであり、引きつづき続編にも期待したい。

中嶋毅の論文「ハルビンのロシア人教育—高等教育を中心に—」は、ハルビンおよび中東鉄道という露中の勢力がせめぎ合いつつ共存する独特の磁場のもとに存立したロシア人社会の構造を、ハルビン法科大学やハルビン工業大学に代表される高等教育の展開という視角から分析している。ここでは「アジアの中のロシア」が考察の主題をなす。しかし、それは単にロシア対アジアという単純な図式で理解される問題ではなく、亡命ロシアとソヴィエト・ロシアの関係も入り組んでいた。いわゆる白系とソ連系が対抗しながら混住する中で、両者間に知的交流関係すら保たれていたハルビン・ロシア人社会の特殊性を浮き彫りにしたことは中嶋論文のとくに注目される点であろう。在外ロシア人の歴史は近年ロシアで流行のテーマとさえなりつつあるが、中嶋論文は豊かな史料基盤に立脚して日本との関連にも目配りしながら問題の核心を着実に掘り下げた労作である。

神長英輔の論文「北洋とは何か 再構築された漁業史と対露観」は、海域に焦点を当てた日露関係史研究である。神長論文の斬新さは、言説分析に基づく日露関係史研究の方法にあるが、そもそもオホーツク海や北太平洋といった海域に焦点を当てる歴史研究の着眼自体が日本の近現代ロシア史研究と日露関係史研究において斬新である。本論文で神長は「北洋」という語が 1930 年前後に広く普及するようになった経緯を明らかにし、当時の言説から「北洋」が想像力に基づく空間概念であり、「北洋漁業」もまた想像力によってのみ説得的な定義が可能な用語であるという結論を導いている。

キャプタ貿易とイルクーツク商人の動向という切り口、内戦期バシキール人ムスリム指導者の足跡という切り口、ハルビン法科大学やハルビン工業大学に焦点を当てた大学史という切り口、「北洋」言説という切り口、それぞれのアプローチは個別の対象に即して区々でありながら、これらの切り口から見えてくるものは均しく冒頭に掲げた問題領域の奥行きの深さではないだろうか。

21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏と地球化」は、研究面のほかに若手研究者養成という教育面も重視するとされており、スラブ研究センターが担当する北海道大学大学院文学研究科スラブ社会文化論専修における教育の充実と、大学の垣根を超えた若手研究者の育成と支援のために、新規の事業や従来の制度を発展させた事

業を行うことを謳っている。同プログラムの一環をなす「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」研究会も、そのような取り組みとして企画・運営されてきた。これまで4回のうちやや異例となったのは2日間にわたった第3回研究会で、中堅の研究者にも報告をお願いした。この事情を反映して、本報告集の執筆者は必ずしも若手ばかりではない。しかし、通常の研究会の企画・運営は主として博士後期課程の在学者、修了者等を中心とし、全国に開かれた若手研究者の成果発表・相互討論の場と位置づけられている。

本報告集が「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア(I)」と銘打っているのは、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」という問題領域に関わる発信媒体の役割を後続の報告集によっても引きつづき果たして行こうという意思表示にほかならない。

2004年6月29日

編集者

北海道大学スラブ研究センター
原 暉之